

(資料7)

資源管理手法検討部会で 整理された意見や論点と対応の方向

令和4年3月3日(木)

第1回資源管理方針に関する検討会
～カタクチイワシ対馬暖流系群～

水産庁

目次

1. 資源管理手法検討部会で整理された意見や論点

2. 意見や論点に関する対応の方向

(1) 漁獲等報告の収集について

(2) 資源評価について

(3) 資源管理について

(4) SH会合で特に説明すべき重要事項について

3. 次回の資源管理方針に関する検討会に向けて

1. 資源管理手法検討部会で整理された意見や論点 (1/2)

(1) 漁獲等報告の収集について

- ① 定置網はほぼ全量魚市場へ出荷、船曳網は漁協の共販であることから、漁獲量データの精度は既に高い。
- ② 魚探等による判別や正確且つ簡便な選別、計量等のための技術開発が必要。
- ③ 資源評価側においても、現場の漁獲実態を正確に把握できるよう、今以上に高頻度での十分な調査を行うべき。
- ④ 漁獲した後にすぐに加工するという特性を考慮して、現場での漁獲量の収集体制を構築する必要がある。
- ⑤ 活餌として販売するものについては漁獲時の漁獲量計数が困難。
- ⑥ 混獲状況も含む水揚げデータを、市場、漁業者、組合、(一社)漁業情報サービスセンターが一元的に管理、運用するシステムが必要。

(2) 資源評価について

- ① 操業実態(加工現場や流通状況、来遊に応じた漁獲等)を踏まえ、漁獲量のみで資源状況を判断すべきではない。
- ② 資源評価に用いたデータを明示するとともに、情報量をよく精査すべき。また評価や調査の拡充を行うべきでは。
- ③ 韓国や中国の同魚種の漁獲データを除外して資源評価されているため、精度や信頼性に懸念。
- ④ 規制によらない(後継者不足や高齢化)漁獲量の減少も想定した資源動向を予測した上で、検討願う。
- ⑤ TACはカタクチイワシとシラスで分けて管理されるのか。0歳魚の獲り控えは、シラス漁も制限する予定か。

1. 資源管理手法検討部会で整理された意見や論点 (2/2)

(3) 資源管理について

- ① TAC管理に係る過去の成功例や失敗例を参考にして資源管理を進めるように努めてほしい。
- ② 親魚量と加入量に相関関係がみられ、親魚の漁獲管理に基づく資源管理を行う前提条件が整っている。
- ③ 仮にTAC管理を導入した場合は、管理を始めた最初の時期に、急に漁獲が減らないようにしてほしい。
- ④ 資源量の変動が激しいため、漁業者が信頼できる目標を設定してほしい。また、目標を柔軟に見直しできるか。
- ⑤ 数量の融通や留保枠の再配分などが迅速にできる枠組み等、柔軟な運用策の準備が必要。

(4) SH会合で特に説明すべき重要事項について

- ① 韓国・中国との共通資源のため、周辺国の漁獲量の正確な把握等の考慮、国際的な資源管理体制の構築。
- ② 先行して導入実施した魚種の問題点や課題を検証し、解決策を検討したうえで行うべき。
- ③ 他魚種の漁獲状況や価格相場などによって漁獲圧が大きく変化するため、先行TAC魚種と同様の管理は困難。
- ④ 「資源」だけでなく「漁業経営」も念頭に入れて議論すべき。
- ⑤ 複数のシナリオがあるが、どのような違いが生じるか分からないため、漁業者等は選択できないのでは。
- ⑥ 魚探の精度向上(おおよその魚種判別)による回避、放流技術の開発や休漁補償等の影響緩和策と合わせて慎重に議論する必要あり。

2. 意見や論点に関する対応の方向

(1) 漁獲等報告の収集について(1/3)

① 定置網はほぼ全量魚市場へ出荷、船曳網は漁協の共販であることから、漁獲量データの精度は既に高い。



- ・引き続き、精度の高い漁獲量データの収集に取り組む。
- ・産地市場・漁協からの水揚げ情報をデータベースに集積する電子的な情報収集体制構築の取組を都道府県等と進める。

② 魚探等による判別や正確且つ簡便な選別、計量等のための技術開発が必要。

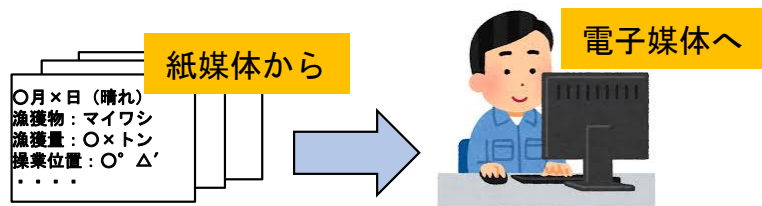


- ・効果的・効率的に漁獲量データを収集する方法の導入や体制の整備、技術開発を継続して行うことが重要であり、資源管理の実施と並行してこうした取組の検討を進める。

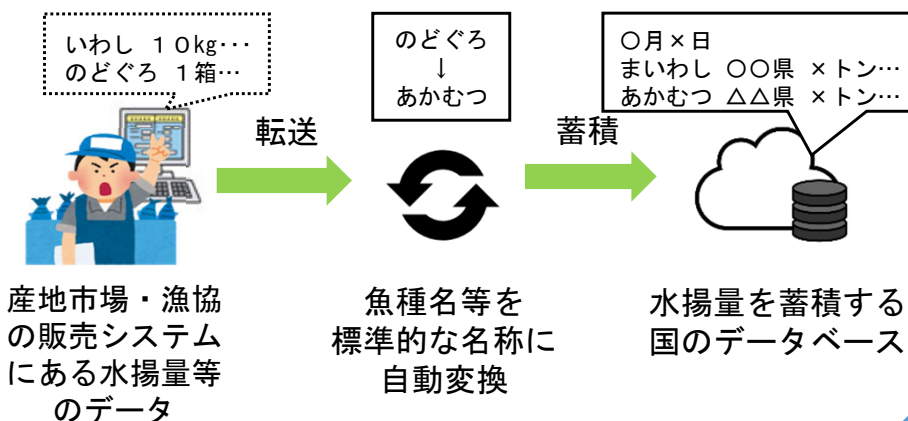
《漁獲情報の収集の具体的なイメージ》

電子漁獲報告の実装、普及

- 大臣許可漁業（大中型まき網漁業、沖合底びき網漁業、北太平洋さんま漁業など）を営む者は、現在、漁獲成績報告書の提出が義務
- 電子による漁獲報告のためのシステム改修を行うとともに、順次、これらを営む漁業者に対しその実装と普及を推進



産地市場・漁協からの水揚げ情報の迅速な収集



国や都道府県の資源評価に活用

2. 意見や論点に関する対応の方向

(1) 漁獲等報告の収集について(2/3)

- ③ 資源評価側においても、現場の漁獲実態を正確に把握できるよう、今以上に高頻度での十分な調査を行うべき。

➡ 必要な予算や人員等を確保するとともに、漁業者や都道府県と協力しつつ、より適切な資源評価が実施できるよう努めていく。

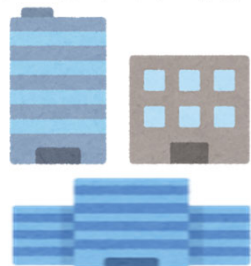
- ④ 漁獲した後にすぐに加工するという特性を考慮して、現場での漁獲量の収集体制を構築する必要がある。

- ⑤ 活餌として販売するものについては漁獲時の漁獲量計数が困難。

➡ ・漁獲後、直ちに加工する場合でも、生きたまま生簀などに入れられる場合でも、最終的に製品や生餌として販売されることから、漁獲量又はそれに相当する情報の収集・利用が可能と考えられる。
・関係都道府県等と協力しながら水揚げ後の取引実態等を把握し、漁獲量の報告に反映する方法を整理するとともに、水揚げ情報の電子的な収集体制構築を行っていく。

《資源評価の実施体制の整備》

都道府県研究機関



水研機構支所

水産資源研究センター



大学等
研究機関



水産資源研究センター（水研機構）と都道府県研究機関や大学等との連携を強化

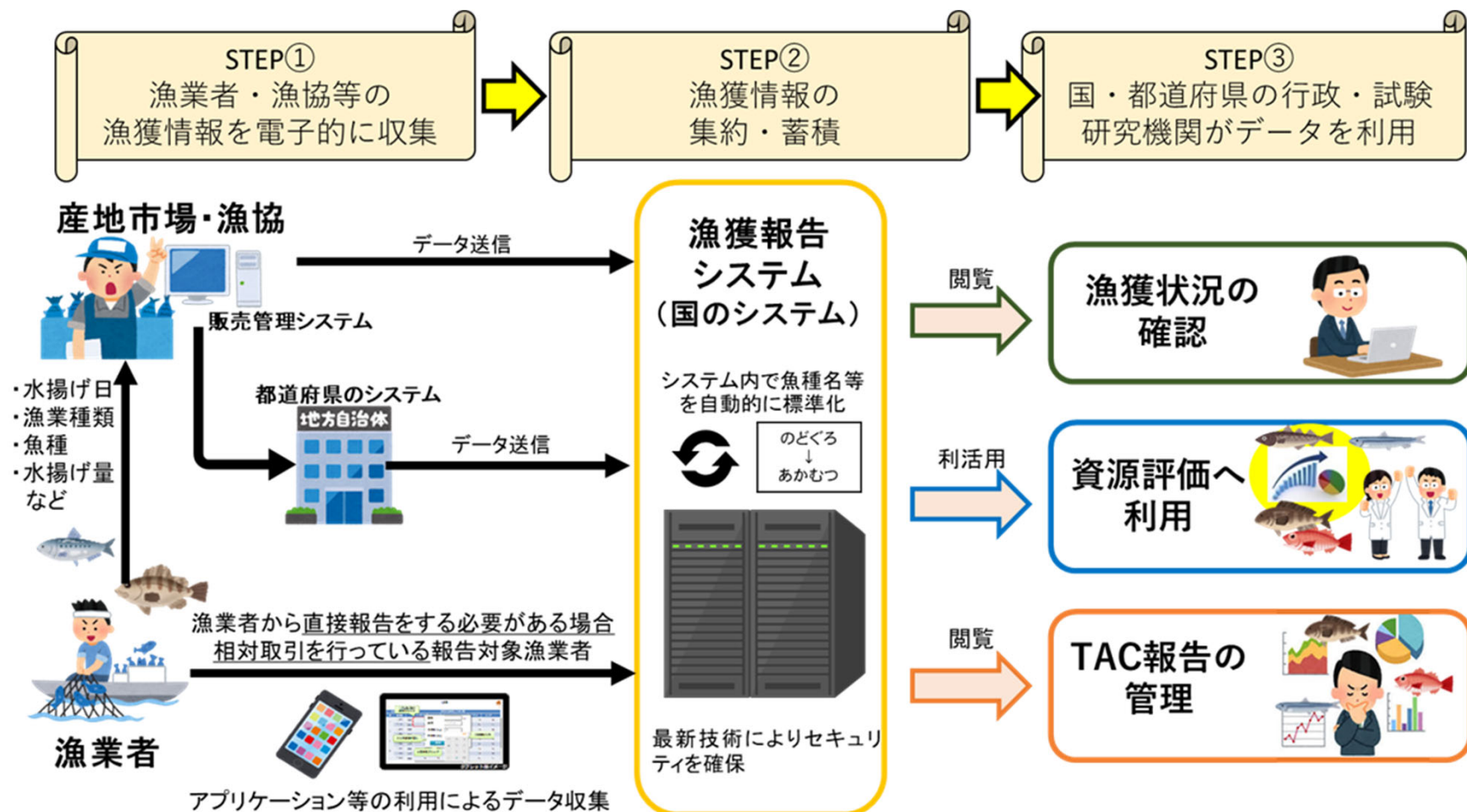
2. 意見や論点に関する対応の方向

(1) 漁獲等報告の収集について(3/3)

- ⑥ 混獲状況も含む水揚げデータを、市場、漁業者、組合、(一社)漁業情報サービスセンターが一元的に管理、運用するシステムが必要。

・産地市場・漁協からの水揚げ情報をデータベースに集積し、各種報告にも活用可能な電子的な情報収集体制構築の取組を都道府県等と進めている。

《漁獲報告システム》



2. 意見や論点に関する対応の方向

(2) 資源評価について(1/2)

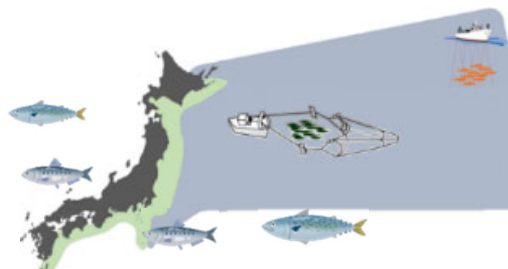
- ① 操業実態(加工現場や流通状況、来遊に応じた漁獲等)を踏まえ、漁獲量のみで資源状況を判断すべきではない。

➡ ・漁獲量は、資源評価を行う上で最も重要な情報であるが、それだけで資源状況を把握しているわけではなく、操業の状況や生物学的知見、調査船調査結果、海洋環境の変化など、利用可能な情報を基に総合的に判断している。今後も資源評価の精度向上に努めてまいりたい。

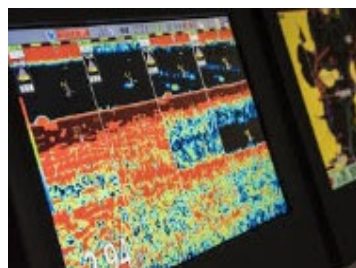
- ② 資源評価に用いたデータを明示するとともに、情報量をよく精査すべき。また評価や調査の拡充を行うべきでは。

➡ ・資源評価に用いたデータについては、可能な範囲で、資源評価の詳細を載せた報告書に記載している。必要な人員や予算等を確保するとともに、漁業者や都道府県と協力しつつ、より適切な資源評価が実施できるよう努めていく。

《資源評価に利用される様々な資源調査》



トロール調査



魚群探知機調査



調査船調査



無人調査機



市場調査

2. 意見や論点に関する対応の方向

(2) 資源評価について(2/2)

③ 韓国や中国の同魚種の漁獲データを除外して資源評価されているため、精度や信頼性に懸念。



・現時点では、韓国・中国等の周辺諸国の詳細な漁獲データは入手できておらず、資源評価に取り込むことにより、不確実性が増す結果となる。資源評価の精度向上に向け、特に、韓国の詳細な漁獲データについては、二国間交渉等の機会を活用し、入手できるよう努めていく。

④ 規制によらない(後継者不足や高齢化)漁獲量の減少も想定した資源動向を予測した上で、検討願う。



・後継者不足や高齢化を考慮に入れた将来予測は難しいものの、漁獲の強さを変化させた将来予測を行っており、こうした結果を基に、どのような漁獲シナリオを選択していくのかを検討・議論していきたい。資源管理の目標や漁獲シナリオは、原則5年毎に見直すこととしており、社会情勢の変化も踏まえ、検討することとしたい。

⑤ TACはカタクチイワシとシラスで分けて管理されるのか。0歳魚の獲り控えは、シラス漁も制限する予定か。



・カタクチイワシの場合、稚魚であるシラスを対象とする漁業と成長の進んだ魚を対象とする漁業の実態が大きく異なること及び資源評価においても分けて考えられていることから、現時点においては、カタクチイワシとシラスで分けて管理することが妥当と考えている。

ただし、カタクチイワシ資源の将来予測では、現状のシラスの漁獲状況(漁獲圧)が続くことを前提としており、シラスを対象とする漁業が大きく変化(拡大)することは想定されていない。

このため、シラスを対象とする漁業については、「漁獲努力量を現状以下に抑えるよう努める。」といった一定の管理方策をあわせて実施することになると考えている。

2. 意見や論点に関する対応の方向

(3) 資源管理について(1/2)

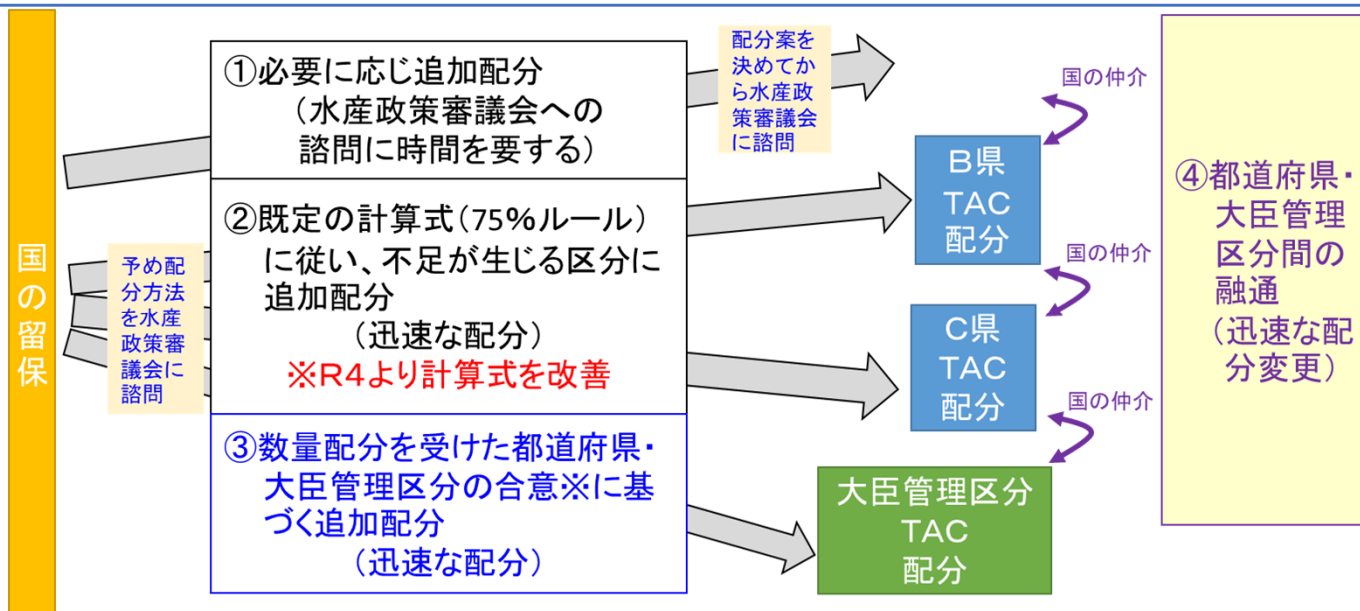
① TAC管理に係る過去の成功例や失敗例を参考にして資源管理を進めるように努めてほしい。

・太平洋クロマグロをはじめ、これまでにTACを導入した魚種の管理において、漁獲量の迅速かつ正確な把握が遅れたり、急激な漁獲の積み上がりに留保枠の配分手続きが間に合わない、漁獲される海域が大きく変化したなど様々な問題が生じてきた。

また、TACの大きな変動は漁業経営や関連産業への影響が懸念されるとの意見を踏まえ、研究機関の協力を得て、次のような漁獲シナリオの採択を行ってきた。

- ① 3年間漁獲量を固定する・・・スケトウダラ太平洋系群
- ② 安全を見込んだ漁獲の強さにする・・・マイワシ対馬暖流系群
- ③ 未消化分の一部の次の管理年度への繰り越し・・・スケトウダラ日本海北部系群、クロマグロ

現在のTACは、そうした課題を乗り越えて、管理を行っているところであり、今後もこのような経験を踏まえるとともに、改善策を講じつつ適切な管理に努めていく。



2. 意見や論点に関する対応の方向

(3) 資源管理について(2/3)

- ② 親魚量と加入量に相関関係がみられ、親魚の漁獲管理に基づく資源管理を行う前提条件が整っている。



・具体的にどのような管理をしていくのか、議論してまいりたい。

- ③ 仮にTAC管理を導入した場合は、管理を始めた最初の時期に、急に漁獲が減らないようにして欲しい。



・漁獲シナリオの検討において、急激な変化を伴わないシナリオを選択することは可能であり、かかるシナリオの検討に役立つ将来予測等の試算を行うこととしたい。

- ④ 資源量の変動が激しいため、漁業者が信頼できる目標を設定してほしい。また、目標を柔軟に見直しできるか。



・資源管理の目標は、持続的に生産可能な最大の漁獲量(MSY)の達成を目指すことが基本であるが、カタクチワシのように若齢魚の方が市場価値が高く、加入量の変動により資源量全体が大きく変動するなど、水産資源特有の状況を踏まえた目標の設定を検討することは可能である。関係者の意見を伺って目標の検討を進めたい。

・資源管理の目標は、原則5年ごとに見直しをすることとしているが、資源状況の急激な変化が見られた場合などは、設定から5年以内でも見直しをすることとしており、その際には、資源管理方針に関する検討会(ステークホルダー会合)を開催し、関係者との議論・検討を行うこととしている。

2. 意見や論点に関する対応の方向

(3) 資源管理について(3／3)

- ⑤ 数量の融通や留保枠の再配分などが迅速にできる枠組み等、柔軟な運用策の準備が必要。



従来のTAC魚種の管理において利用している様々な管理上の工夫については、カタクチイワシのTAC管理を行う場合においても、活用していきたい。

《従来のTAC魚種の管理において利用されている管理上の工夫の例》

- ◎留保枠の設定と追加配分：まいわし、まあじ、さば類、するめいか、ずわいがに
…予期せぬ来遊等があった場合に、漁獲枠を超過するリスクを低減するため、必要となった管理区分に追加配分できるように、予め国などに一定の漁獲枠を確保しておく工夫。
※ 一部の魚種には、予め決められたルールに従って、一定の漁獲の積み上がりが見られた場合等には、留保枠から速やかに追加配分するという運用も行っている。
- ◎漁獲枠の融通：全てのTAC魚種
…関係者間での協議を経て、漁獲枠が不足しそうな管理区分に、漁獲枠に余裕のある管理区分から漁獲枠を移し替えること。管理区分間の合意により速やかな移し替えも可能。
- ◎未利用漁獲枠の繰越し：くろまぐろ、すけとうだら日本海北部系群
…予め科学的なリスク評価を行った上で、未利用分の一部を翌年度に繰り越す工夫。

2. 意見や論点に関する対応の方向

(4) SH会合で特に説明すべき重要事項について

- ① 韓国・中国との共通資源のため、周辺国の漁獲量の正確な把握等の考慮、国際的な資源管理体制の構築。



・資源管理は、現時点での最新の科学情報に基づいて行うものであり、引き続き、周辺外国の漁獲等の正確な把握による資源評価の精度向上に努める。そして、必要となる周辺諸国の対応については、二国間交渉等の機会を活用し、取り組んでいく。

- ② 先行して導入実施した魚種の問題点や課題を検証し、解決策を検討したうえで行うべき。



・太平洋クロマグロをはじめ、これまでにTACを導入した魚種の管理において、漁獲量の迅速かつ正確な把握が遅れたり、急激な漁獲の積み上がりに留保枠の配分手続きが間に合わないなど様々な問題が生じてきた。現在のTACは、そうした課題を乗り越えて、管理を行っているところであり、今後もこのような経験を踏まえるとともに、改善策を講じつつ適切な管理に努めていく。

- ③ 他魚種の漁獲状況や価格相場などによって漁獲圧が大きく変化するため、先行TAC魚種と同様の管理は困難。



・本資源は、他の魚種と比較した場合の単価の違いや漁場形成状況、水揚げ港の処理能力などの要因により漁獲の強さが大きく変動することから、漁獲努力量の適切な把握に努めるとともに、かかる観点も踏まえてどのような漁獲シナリオが適当か関係者の意見を伺って検討していく。

2. 意見や論点に関する対応の方向

(4) SH会合で特に説明すべき重要事項について

④ 「資源」だけでなく「漁業経営」も念頭に入れて議論すべき。



・本会合において、漁業者をはじめとする関係者の意見を踏まえ、漁獲シナリオの検討等を進めていく。

⑤ 複数のシナリオがあるが、どのような違いが生じるか分からないため、漁業者等は選択できないのでは。



・漁獲シナリオの説明において、丁寧に対応することとしたい(本会合において対応)。

⑥ 魚探の精度向上(おおよその魚種判別)による回避、放流技術の開発や休漁補償等の影響緩和策と合わせて慎重に議論する必要あり。



・「新たな資源管理システム構築促進事業のうち数量管理のための技術開発」予算などを活用し、混獲回避や放流技術の開発を進めていく。

・経営等への影響への懸念については、まず資源管理の目標を定め、その目標達成に向けてどのように資源を回復させていくのか、漁獲シナリオにおいて検討する必要がある、本会合において議論していく。

・選択される可能性のある漁獲シナリオに応じて、漁業収入安定対策や国際漁業等再編対策事業等の活用可能な影響緩和策についても、あわせて検討していく。

3. 次回の資源管理方針に関する検討会に向けて

- ◎ 本日の議論を基に、必要に応じて、水産機構による追加の科学的検討を行い、次回の検討会でその結果を報告。
- ◎ 水産庁から、仮にTAC管理を導入した場合に、どのような管理となるのか、管理のイメージを紹介。

新たな資源管理の検討プロセス

①	資源評価結果の公表	- 令和3(2021)年3月に神戸チャート公表 - 令和3(2021)年9月に将来予測を含めた結果公表
②	資源管理手法検討部会	- 令和3(2021)年12月に開催 - 参考人等からの意見や論点を整理
③	ステークホルダー会合 (資源管理方針に関する検討会)	②で整理された意見や論点を踏まえ、具体的な管理について議論 - 必要に応じ、複数回開催し、管理の方向性をとりまとめ
④	資源管理基本方針の策定	③でとりまとめられた内容を基に、資源管理基本方針案を作成 - パブリックコメントを実施した後、水産政策審議会資源管理分科会への諮問・答申を経て決定
⑤	管理の開始	

本日はここ